

毎年5月の最終月曜日は戦没将兵追悼記念日（メモリアル・デー）です。祖国アメリカのために命を捧げた人達の墓地や記念碑が花や国旗で飾られ、ボストンコモンの戦没者記念碑の建つ丘も星条旗に覆われます。記念日の切っ掛けは、米国南部の女性の組織が南北戦争で命を落とした南軍兵士たちの墓に花などを捧げたことのようにです。

ボストンコモンでは、メモリアルデイに 37,748 もの国旗が敷地内に飾られます。旗の一枚一枚が、独立戦争から今日に至るまでに、アメリカ合衆国のために戦い、亡くなった人々を象徴しており、兵士と海兵の記念碑（Soldiers and Sailors Monument）の前に旗は飾られ、多くの人々が追悼に訪れます。そして、彼等への敬意と反省を忘れないように記憶に刻まれていきます。今年は、5月26日から5月30日の月曜日の日没までその景色を見ることができます。

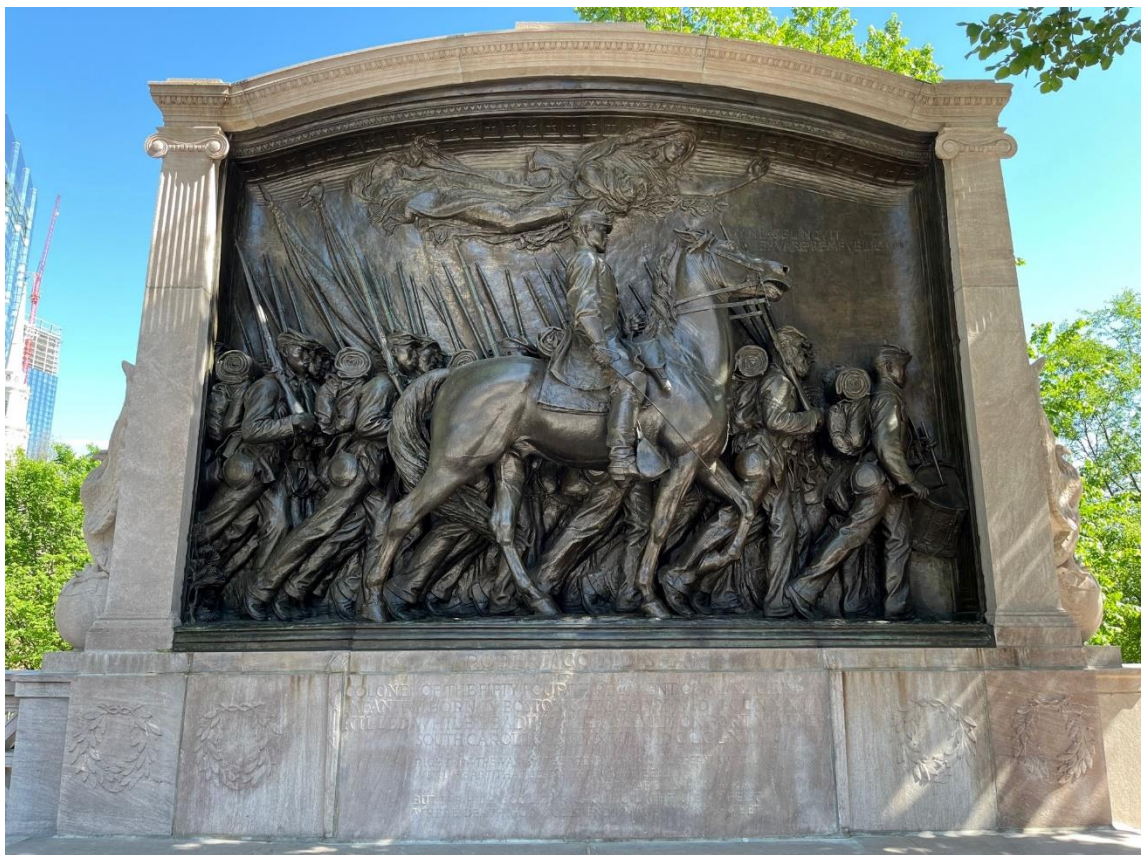


（2022年5月26日撮影）

今回のボストン歴史探訪は、これまでに扱った 18 世紀の独立戦争から時代を下り、19 世紀の南北戦争の時代に舞台を移します。

昨年 2 月、新型コロナウイルスの感染による米国内の累計死者数が 50 万人を超えた際、米 ABC ニュースは、過去の戦争による米軍の死者数は第二次世界大戦が 40 万 5 千人、ベトナム戦争 5 万 8 千人、朝鮮戦争 3 万 6 千人に上るとして、「新型コロナの死者数は 3 回の戦争の犠牲者に匹敵する。」と報じました。一方で、南北戦争（1861 年から 1865 年）の戦没者数はアメリカ史上最大の約 62 万人、その規模に驚かされます。

ボストンコモンへの入り口にも南北戦争と関わりの深い銅像記念碑があります。



（2022 年 5 月 24 日撮影）

マサチューセッツ州議会議事堂の正面、ビーコンストリートを挟んで設置されている第 54 マサチューセッツ歩兵連隊の銅像記念碑です。1863 年 5 月 28 日、南部の戦場に向かうため、ビーコンストリートを馬に乗り行進する勇姿が描かれています。中央の馬上がロバート・グールド・ショー大佐、共に行進するのがアメリカ合衆国史上最初の黒人部隊の一つである連隊の兵士達です。

映画「グローリー (GLORY)」では、この黒人部隊の誕生、悲惨な待遇、厳しい訓練、白人兵の偏見と差別、誇らしい出陣式、沼地での苦役、初戦の勝利、ワグナー砦での激戦、大佐と多くの兵士の死、黒人部隊の待遇改善の厳しい道のりをデンゼル・ワシントンやモーガン・フリーマンが熱演し、アカデミー賞3部門に輝きました。



出典： Encyclopedia Britannica: Glory film by Zwick [1989] Britannica

<https://www.britannica.com/topic/Glory-film-by-Zwick>

ロバート・グールド・ショー大佐は、ボストンの裕福な奴隷解放論者の家族に生まれました。1856年から、ハーバード大学にて学んだ後、第7ニューヨーク歩兵連隊に入隊し、1861年4月のワシントン攻防戦に参加しました。1862年、マサチューセッツ州知事、黒人指導者のフレデリック・ダグラス、父親の薦めもあってアメリカ合衆国初の全黒人部隊である第54連隊の隊長となりました。彼は、かつては奴隷であった人々を兵士として鍛え上げ、更には、黒人兵士が白人兵士より少ない給与に甘んじていることを知り（白人兵士は月給10ドルであったのに対して黒人兵士は7ドルであった。）、不平等が改善されるまで給与の受取拒否を行うなど、精力的に黒人差別の改善を訴えた人物でした。ショー大佐と第54連隊の黒人兵士たちの活躍もあって、黒人奴隷を北軍の兵士として迎えることを当初は拒否していたリンカーン大統領を始めとする北部の指導者達も徐々にその考えを変えていったと言われています。

1863年7月、第54連隊は、難攻不落とされていたサウスカロライナ州ワグナー砦の戦いに臨み、白人部隊の先頭に立って突撃しましたが、ショー大佐を含む600人の連隊の約40%が命を落としました。第54連隊の勇猛な戦いは従軍記者達の筆によって有名となり、第54連隊のウィリアム H カーニー (William H. Carney) は激戦にもかかわらず連隊旗を守り通した功績により、アフリカ系アメリカ人として初めて名誉勲章を獲得しました。



出典：National Park Service: William H. Carney

Sgt William Carney holding the American Flag, ca. 1864.

<https://www.nps.gov/articles/william-h-carney.htm>

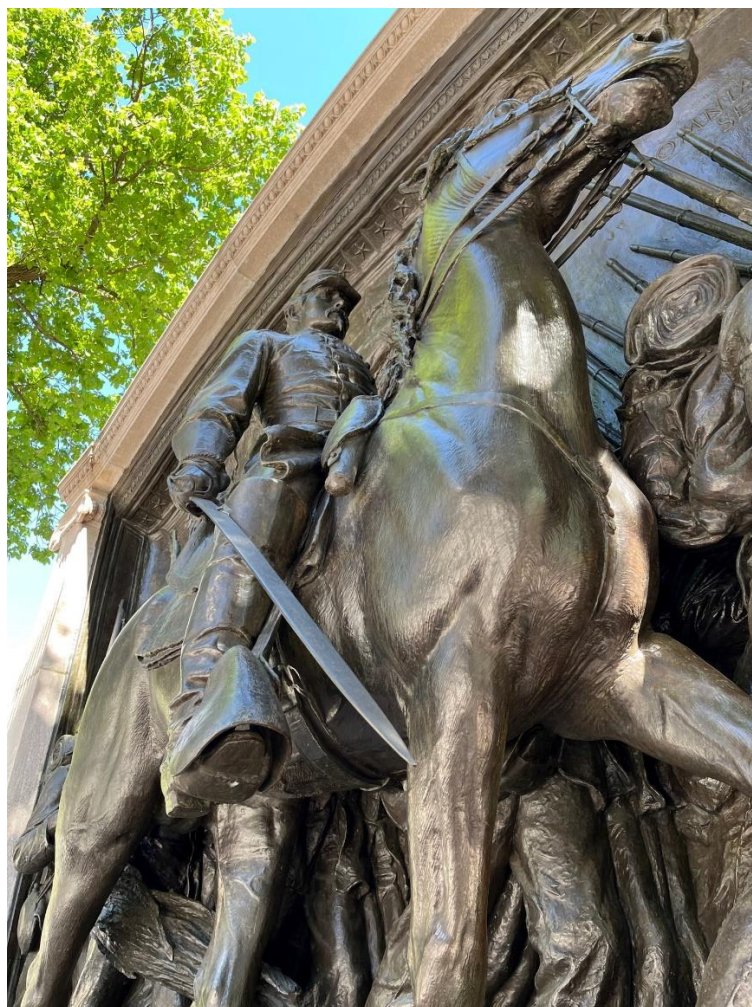
ワグナー砦の戦いでの黒人兵士達の活躍により、北部の指導者達の考えも徐々に変わり始め、多くのアフリカ系アメリカ人が北軍に入隊する道を開きました。南北戦争の終結までに、約 18 万人以上の黒人兵士達が北軍に従軍し、北軍勝利への重要な役割を果たしました。



出典：Guns And Sword Collector.com: Robert Gould Shaw Civil War Battle Sword (2017/8/17)

Copyright © Andrew Mowbray, Inc. — Publishers – 2022

<https://gunandswordcollector.com/robert-gould-shaw/>



(2022 年 5 月 24 日撮影)

銅像記念碑のショー大佐が右手で握っている剣がマサチューセッツ歴史協会にて保管されているとのこと。

現在保管されている剣は、2017 年にショー大佐の子孫ロバート・ショー氏らが、両親の家を整理していた時に屋根裏に放置されていた 5 本の古い剣を発見し、その中でも一段と古い、さやのない剣に「RGS」というさびたイニシャルが入っていることに気づき、マサチューセッツ歴史協会に寄贈したものだそうです。この剣が、ワグナー砦の戦いで実際にショー大佐が使用したと言われているそうです。

一方、2013 年にもマサチューセッツ歴史協会にはショー大佐の剣が寄贈されています。この剣は、1865 年、北軍将軍のチャールズ・ジャクソン・ペイン氏が元南軍の将校の家から回収してショー大佐の両親に送り届けられ、その後、子孫が保管し続けマサチューセッツ歴史協会に寄贈されたとのこと。2017 年に新たに発見された剣が寄贈されるまでは、この剣がワグナー砦の戦いで使用された剣であると思われていました。

歴史は一筋縄ではいかないものです。ワグナー砦の攻撃でショー大佐が部下を鼓舞した剣がどれなのかは、今となっては神のみぞ知ると言うことでしょうか。

出典：

1. History.com “Civil War”
<https://www.history.com/topics/american-civil-war/american-civil-war-history>
(2022/5/18 閲覧)
2. American Center Japan 「米国の歴史の概要－南北戦争と再建期」
<https://americancenterjapan.com/aboutusa/translations/3481/> (2022/5/18 閲覧)
3. コトバンク 南北戦争
<https://kotobank.jp/word/%E5%8D%97%E5%8C%97%E6%88%A6%E4%BA%89-108979> (2022/5/18 閲覧)
4. Gigazine
「南北戦争の剣における聖杯」と言うほど貴重な「失われた剣」が発見される」 (2017/7/27)
<https://gigazine.net/news/20170727-holy-grail-of-civil-war-swords/> (2022/5/18 閲覧)
5. Live Science “Holy Grail of Civil War Swords’ Found in Massachusetts Attic” (2017/7/25)
<https://www.livescience.com/59933-civil-war-sword-found-in-attic.html> (2022/5/18 閲覧)
6. Delphipages.live 「第 54 連隊：米軍」 (2020/9/12)
<https://delphipages.live/ja/%E3%81%9D%E3%81%AE%E4%BB%96/54th-massachusetts-regiment> (2022/5/18 閲覧)
7. Friend of the public garden “The Partnership To Renew The Shaw 54th Regiment Memorial”
<https://friendsofthepublicgarden.org/shaw54th/> (2022/5/18 閲覧)
8. Gun and Sword Collector “Robert Gould Shaw Civil War Battle Sword” (2017/8/17)
<https://gunandswordcollector.com/robert-gould-shaw/> (2022/5/18 閲覧)
9. “Civil War memorial to 54th Regiment returns to Boston Common” Boston Globe (2021/3/3)